招聘研究員

氏　　名	マリアンナ　ザネッタ（Marianna ZANETTA）
所属機関等	フランス国立高等研究院　東アジア文明研究センター
受入期間	2017 年 10 月 1 日～2017 年 10 月 19 日
指導教員	昆　政明
研究課題	消えゆく東北のシャーマンについて

消えゆく東北のシャーマン

マリアンナ　ザネッタ

はじめに

本稿では、東北地方において「イタコ」として知られる民間の女性宗教職能者について取り上げたい。

イタコは日本の民間信仰に特有のものである。従来、イタコは生まれた時から盲目であるか、幼少期に盲目となった者たちで、その障害のためにシャーマンを生業として選んだ。しかしそのことが、イタコの経験の真正性やイタコをシャーマニズムの分野に含めることに疑問を抱く研究者、シャーマニズムの専門家の論拠となっている。

私は主に、イタコの巫業と死者の世界との結びつき、特に口寄せに興味を持って研究している。イタコの現在の活動の中心が、死者の魂を呼びよせ、その近親者が死者とコミュニケーションできるようにする「口寄せ」の儀式となっているためである。

イタコについて語るためには、人類学のさまざまな問題に向き合う必要がある。

第一に、シャーマニズムとは何かという問題である。シャーマニズムは、人類学の歴史の中で最も盛んに分析、使用（誤用）、研究されてきた観念であり理論的構成概念の一つである。

シャーマニズムについての議論に貢献したエリアーデ（Mircea Eliade）と時期を前後して、シャーマニズムに関して大量の文献が作成され、さまざまな分野の研究者によって重要な調査・研究が行われた。こうした状況を考えると、Eliade が提供した定義を脱構築（deconstruct）し、このテーマを新たな視点の中に置くことが不可欠であろう。Roberte Hamayon は、全般的に欧米の研究者がシャーマンの社会的位置づけを考慮せず、もっぱら個々のシャーマンの人物だけに焦点を合わせる傾向があると批判しているが、とりわけ、この批判の後は、脱構築（deconstruction）が欠かせないと考える。これに関して言えば、Hamayon は、シャーマン的な経験を解釈するための手段として「役割（role）」の概念をより広く使う一方で、「トランス（trance：変性意識状態）」、「エクスタシー（ecstasy：脱魂）」などの概念に対して新たなアプローチで取り組み、シャーマニズムの研究でこれらの概念を適切に使用していることで知られている。

Ⅰ　理論的背景

理論的観点から、私の研究の性格上、宗教研究の新たなアプローチの基盤となるコンセプトをいくつか紹介する必要がある。

（1）複雑さ（Complexity）

あらゆる文化的現実の特徴の一つが、複雑さである。したがって、単純な伝統習俗は存在しない。

宗教は複雑な信仰体系である。

宗教を複雑な体系として特徴づける主な要素は、現実の複雑さを説明する必要がある知識の創出として、宗教を捉える考え方である。

・宗教は、存在の複雑さに対する人間の防衛反応であ

る。宗教には、（秩序と分別を生み出す）静的な側面と、（個々が創出される瞬間の）より動的な性質がある。
・宗教と複雑さの結びつきは、地方で最も顕著に認められる。制度化された有力な宗教では複雑さが減じられ、教義の硬直化へと向かうが、地方に伝わる習俗の多くは、柔軟性や創造性を許容する複雑さの探求に価値を置く。
・宗教制度とは、個々の経験が相互に作用し合う状態をいう一方で、象徴的記号や意味の集合であり、標準化された慣習である。こうした慣習や意味は永遠不変のものではなく、存在の複雑さと相互に作用し合う。

（2）文化創造力（Cultural Creativity）

複雑さは、創造力そのものや、創造力の発現あるいは妨げになるものと強く関連している。

文化創造力とは、一定の特殊な状況が与えられた場合に、予測できない新たな構造を生み出す能力で、すべての人間社会にこの力が備わっている。

文化創造力を見つけ出すためには、文化創造力に至る前段階の状態に気づく必要がある。
・第一に、文化創造力は社会構造からの承認と結びついている。
・第二に、新しい画期的なアイデア（innovation）が受け入れられるためには、社会の要望やニーズに応じる必要がある。これは、常に社会的共有経験から生じる状態である。

文化創造力の考え方
・文化創造力は、与えられた歴史的状況の中で、新しいモデルを生み出して変化に向き合う文化の力を明確にするのに役立つ。
・文化創造力は、さまざまな社会が持つ多様性や複雑性に向き合う最初の瞬間としてのフィールドワークの重要性や、多様な社会が相互に維持する、多くは問題をはらんだ複雑な関係の重要性を高める。

（3）Anthropo-poiesis

上記に示された概念や理論は、この 10 年間に生み出された人類学の新しい理論、anthropo-poiesis につながるものである。

Anthropo-poiesis は、本稿では「人間（ヒト）を作り上げる」という意味で使用されている。

この理論的概念は、主に、以下に挙げる三つの要素から生じる。
・社会科学や人間科学で幅広く用いられる構造主義的理論。構成（construction）、創作（invention）、虚構（fiction）をコンセプトとする。
・民族誌学者が研究する多くの社会は、儀式（特に、イタコの場合はイニシエーションについて検討する）について、社会自体が、人間の形成／創成というコンセプトを中心とする興味深い解釈を行っているという事実を認める考え方
・古人類学や神経科学の分野に由来する、人間はもともと不完全だとする説

Anthropo-poiesis は、人間らしさ（humanity）はその都度作り出されてモデル化されるという仮説に基づく考え方である。多様な「人間らしさ」を形成する作業はそれぞれの社会に帰属するが、その社会はこの役割を認めることもあれば、隠すこともある。

Anthropo-poiesis の理論は、人間が生物学的に不完全であるだけでなく、文化的にも不完全だということを強調している。
・文化に大きく依存することが、人間の生体機能の一部を弱体化させた。
・文化的に決定された具体的な解決策は、それ自体が

不完全さの源である。

どの文化的行為も選択するという行為であるため、文化的行為は歴史的、社会的な特殊性を生み出す。したがって、可塑性という概念につながる。

- 人間には自由に変化する可塑性がある。さまざまな形成行為の対象であり、（日常的な身振りにあるような）身近なもののモデリング（casual modeling）を行う。モデリングは日々の社会生活の流れの中で人間が無意識に行う継続的な形成過程である。
- 身近なものをモデリング（casual modeling）する形成行為と並んで、例えば家族、国、学校、制度などのような、恣意的に形成される anthropo-poietic なものも存在する。つまりは、形成行為を実際にする主体（actual agent）や形成行為の対象の定義につながる。ここに権力との結びつきがある。
- 最後に、儀式（特にイニシエーション）の重要性を考慮することも大切である。儀式に際して、社会の成員は自分の属するコミュニティーの姿を認識し、その姿を形作るために用いられる装置やテクニックに異議を唱えるようになる。

II　方法論

本稿は、2012 年に始まり現在（2017 年）まで継続しているフィールドワークや、文献資料に依拠している。主に関心のある地域は東北地方、とくに青森県である。

本稿の分析に用いた一次資料

- 青森県や宗教行事でのフィールドワークにおける筆者自身の観察
- 八戸や弘前でイタコやカミサマ、依頼者、神主、恐山の僧に実施した聞き取り調査
- 同じような分野でフィールド調査を行う研究者や、日本国内外（東京、仙台、岩手、米国、カナダ）の大学の研究者とのインタビューや交流
- 青森県立郷土館の専門家との面談。イタコの人数の減少について話を聞いた。
- 青森県庁職員への聞き取り調査。1990 年代後半の映像や、2000 年代初頭の写真の分析
- パンフレット、雑誌、新聞、インターネット・サイトを参照

III　盲目の巫者の経験

(1) 過去の研究・理論の予備分析

過去の研究の具体例

- 川村邦光：*fusha* in Miyagi prefecture（宮城県の巫者）(1994)
- 佐藤憲昭：*kamisama* initiation（カミサマ・イニシエーション）(1981)
- 北原かな子：津軽のイタコ
- 滝口直子：female shamans in Miyako islands（宮古島の女性シャーマン）(1984)
- 高松敬吉：『青森県下北郡の民間巫女（サンヤマサイタコ）の三人の人生史 Life History ― その後』(2007)
- 小林栄：relationships between *itako* and Osorezan（イタコと恐山の関係）
- 池上良正：kamisama and folk practitioners（カミサマと民間宗教職能者）
- 大道晴香
- 村上晶、Ioannis Gaitanidis（ヤニス・ガイタニディス）

オシラサマ　青森県立郷土館蔵
写真：マリアンナ　ザネッタ

上記の研究者は、さまざまな地域の実情について直接入手した情報を提供してくれるため、巫業の発展や主要動向を追うことができる。この他、日本のシャーマニズムに関する（日本・欧米の研究者による）重要な研究としては以下が挙げられる。

- 桜井徳太郎『日本シャマニズムの研究』(1988)
- 堀一郎『日本のシャーマニズム』(1971)
- Carmen Blacker（カーメン・ブラッカー）：『The Catalpa Bow: A Study of Shamanistic Practices in Japan』（邦題：あずさ弓―日本におけるシャーマン的行為、秋山さと子訳、岩波書店、1975）。適切な歴史的背景を欠いてはいるが、日本のシャーマニズムに関する広範な研究である。
- Alain Miller（アラン・ミレール）：東北の宗教職能者や、これに関連する神話を中心に研究（1993、1995）
- Massimo Raveri（マッシモ・ラベリ）：シャーマニズムや行者修行との関連で日本の宗教信仰を深く分析（1998、2006）
- Gerald Groemer（ジェラルド・グローマー）：

『Female Shamans in Eastern Japan during the Edo Period』（江戸時代の東日本における女性シャーマンの研究、2007）
- Barbara Ruch（バーバラ・ルーシュ）：中世シャーマニズムに関する研究（1991）
- Anne Bouchy（アンヌ・ブッシー）：京都の盲目の女性シャーマンに関する研究（1992）
- Peter Knecht（ペトロ・クネヒト）：東北地方の盲目のシャーマンと口寄せに関する報告・研究（1997）

（2）定義と主な特徴

少なくとも江戸時代から、東北にはさまざまな巫者（shamanic practitioner）の伝統があった。こうした巫者には重要な特徴がある。
- 昔は盲目の巫者が大勢いたが、いくつもの理由が同時期に重なったことから、急速に数を減らしている。
  - ✧ 盲目の巫者の呼び名はいくつもあり、地域によって異なる：イタコ、イチコ、ミコ（ミゴト）、オナカマ、ワカ、アガタ、オガミサマ、オカミンなど。
  - ✧ 盲目の巫者は、死者の魂を呼び出す「口寄せ」という儀式を行う霊媒としてよく知られている。口寄せの他にも、カミオロシ、オシラ様遊ばせ、占いなどの儀式を行う。特に、昔は地域の治療師として知られていた。
- 目が見える巫者は、それほど一般的ではないが、数が増えている。
  - ✧ 目が見える巫者は、通常、ハヤリガミサマ、カミサマ、センセイなどと呼ばれる。
  - ✧ 目が見える巫者は、もっぱらカミゴトや占いの儀式だけを行う。

（3）イタコの人数

以前のデータと私の最近の調査を組み合わせると、以下のような傾向が明らかである。
- 1952 年：21〜22 人ほど
- 1964 年：1952 年とほぼ同数
- 1970 年：大祭には 33 人のイタコが出席。この他に、大祭の数日前に去ったイタコが 8 人
- 1993 年：15 人
- 2012 年：2 人（青山さん、小笠原さん）
- 2014 年：3 人（青山さん、小笠原さん、松田さん）

宮城でも同様に巫者は減少傾向にある（川村 1994）。
- 1984 年には、オガミサマが 44 人、カミサマが 138 人ほどいた。
- 近年（2000 年代）はオガミサマの数は十数名にまで減った。

上述の人数は青森県のイタコ全員の人数ではないが、イタコの減少は東北地方全体に見られる傾向である。

減少の理由はさまざまである。
- イタコやオガミサマとして活動する者が高齢化し、引退したり活動を減らしたりしている。イタコやオガミサマの多くが最近になって亡くなった。
- 修行して新しくイタコやオガミサマになる者がほとんどいない。
  - ✧ 医療の普及により、盲に至る病気を防ぐことができるようになった。
  - ✧ 福祉制度や義務教育のおかげで、視覚障害を持つ少女にイタコに代わる道が開かれた。

（4）イタコとの出会い―イタコの現状

調査では 3 人のイタコと会うことができた。
- 中村さん（1930 年代生まれ、全盲）
- 青山さん（1932 年生まれ、視力あり）
- 松田さん（1972 年生まれ、視力あり、最後のイタコ）

中村さん
- 従来のイタコと同じく、北部農村の貧しい農家の出身
- 幼い頃に全盲となった。
- イタコの道に入ったのは、家族の選択、盲目など視覚障害者に対する社会の態度、経済状態などの結果で、他に選択肢がなかったため。

青山さん、松田さんの 2 人には、こうしたイタコの従来のイメージとは異なる点が見られる。
- どちらも盲目ではない。
- どちらも、経済的理由からイタコになったわけではない。
  - ✧ 青山さんは、盲目のイタコであった母親を継いだ珍しいケースで、自らの特殊な状況を認識し、イタコになった。
  - ✧ 松田さんは、年配のイタコと出会い、人生が変わる経験をしてイタコとなった。純粋に個人的な使命感だと本人は語っている。

彼女たち 3 人は、イタコの変化を二つの意味で体現していると考えられる。
- 一定の伝統の枠内で、多様なイタコの在り方が可能

であることを強調している（中村さんと青山さんは同い年）。
・イタコについて複数の将来像を示している。

変化するイタコの姿は、文化創造力を表す具体例と考えることができる。
・所与の文化モデル（イタコという巫業）が、外的要因（いろいろな理由で盲目の人が不足していること）により、時には意識的に、大きな変容を遂げる。
・こうした変容は新たな解決策や個人の革新につながる場合がある。従来は目の見えない人のためにあったイタコという役割を、目が見える者が担い、イタコとしての地位を確立した。

（5）イタコの巫業の変化
儀式の種類
・前述の３人によると、以前、イタコが行う巫儀は以下のようにさまざまな種類があった。
✧ カミオロシ
✧ 口寄せ
✧ オシラ様遊ばせ
✧ まじない、占い
✧ 治療の儀式
✧ その他

・現在では、イタコからは主に口寄せや死者とのコミュニケーションが連想される。

口寄せの儀式も変化した。
・口寄せ全体の縮小（特に恐山で）
・集団で行われる儀式が一部廃止され、個別で行われる。
・四十九日の口寄せなど、口寄せの風習の一部が消失した。

（6）イタコが巫業を行う時
・2000 年代初めまで、イタコは祭りなど地元行事に参加していた。中でも、恐山大祭、五所川原の川倉賽の河原地蔵尊例大祭などが有名である。こうした公的な場の他、イタコはさまざまな時期に客の依頼により個別に儀式を行っていた。
・現在、当然のことながら、イタコが出向く行事の数は減っている。
✧ 中村さんと青山さんは大祭には参加しておらず、健康上の理由から、個人の依頼者と会う機会も減らしている。
✧ 松田さんは今でも恐山大祭で活発に活動し、個人の依頼者も積極的に受けている。また、ホテルや山形県の旅行会社（団体旅行を企画）、東京の旅行会社の共同企画による、新しい形の口寄せイベントを野辺地の馬門温泉で始めた。

こうした活動のおかげで、ポスト・コンテンポラリーの宗教意識―新たな形のシャーマニズムに対する関心が高まり、死者との新たな出会いが強く求められる時代―に向けて、イタコの活動が大きく変化する可能性が開かれる。

松田さんも青山さんも、青森全体で大勢の「似非イタコ」が蔓延していることに強い懸念を抱いていた。「似非イタコ」は、イタコの名を騙り、八戸の各地や多くはインターネット上で、占いや癒しの儀式を提供する偽者である。
・「イタコ占い」を名乗る多くのウェブサイトでは、電話でイタコと連絡が取れるとか、電話で口寄せを行えるなどと謳っているが、こうしたサイトでイタコを名乗る女性は、本物のイタコからイタコとして認められた者ではない。

The disappearing shamans of Tōhoku

East Asian Civilisations Research Centre　Marianna Zanetta

Introduction

The present work wants to deal with the specific area of Tōhoku, and with the female folk-religious practitioners that go under the names of *itako*.

Itako represent a peculiarity in the Japanese folk religions: traditionally they were blind from the birth, or became blind in the early childhood, and the shamanic activity was chosen as a consequence of this physical handicap. It is exactly this element which caused polem-

ics from different scholars and shamanism experts who questioned the authenticity of their experience and even the possibility to include it in the field of shamanism.

The main point of interest in my research, is the connection between the *itako* practices and the world of the dead, particularly considering that their main activity is, at present, the *kuchiyose* ritual, through which the itako call the spirit of the dead and allows them to talk with their living relative.

To talk about itako, we need to face different anthropological topics.

The first one is the notion of shamananism. Shamanism has been one of the most analyzed, used (and misused) and studied concept and theoretical construct in the history of anthropology.

Given the abundant literature produced on the topic before and after Eliade's contribution to the discussion, and the important surveys and investigations from various fields of study and researchers, it will be fundamental to deconstruct the definition provided by Eliade, and locate the subject in the new course of study, following in particular, Roberte Hamayon who criticizes the general tendency of western researcher to focus almost exclusively on the figure of the shaman forgetting the his or her social position. In connection to this, Hamayon is renowned is her new approach to the concept of "trance", "ecstasy" and the like, and their appropriate use in the study of shamanism, while making wider use of the concept of "role" as a means to interpret the shamanic experience.

Theoretical settings

From a theoretical point of view, due to the nature of my research, it is necessary to introduce some concepts that are the basis for a new approach to the study of religions.

1. Complexity

Complexity is a character of every cultural reality, with the consequence that there are no simple traditions.

Religions are complex beliefs systems.

The main element that characterize religious systems as complex systems is the notion of religion as creation of knowledge that must account for the intricacy of reality.

- Religion are a defensive reaction of human kind against the complexity of the existence; religion has a static dimension (that creates order and sense) and a more dynamic character (in the moments of individual creations).
- The link between religions and complexity can be best perceived in the local, marginal contexts; while the great institutionalized religions tend to reduce the complexity towards dogmatic stiffening, many local traditions value the exploration of the complexities which allow more flexibility and creativity.
- A religious system is an interaction between individual experiences on one hand, and collective symbols and meaning, and standardize practices on the others; these practices and meanings are not timeless, but they interact with the complexity of the existence.

Cultural Creativity

Complexity is strongly related to creativity, its emergence or its prevention.

Cultural creativity is the capacity of every human society to create new and unpredictable structures, given specific extraordinary situations.

In order to find cultural creativity, we have to recognize some preliminary conditions:

- firs of all, it is bound to the reception from the social structure.
- Secondly, for an innovation to be accepted, it has to answer to some social ambition or need. It is a condition always resulting from experiences of social sharing.

The notion of cultural creativity

- It helps clarifying the cultures' capacity in given historical situations, to face change through the generation of new models;
- it reinforces the importance of fieldwork as a fundamental moment to face the variety and the complexity of the different societies, and of the multiple and often problematic relationship they maintain with each other.

Anthropo-poiesis

The notions and theories suggested above lead to the introduction of a new anthropological theory developed in the last decade: the notion of anthropo-poiesis.

This expression is here employed with the meaning of building of the man (human being).
This theoretical concept arises from three main elements:

- the constructivist theories, widely popular in social and human sciences, with their ideas of construction, invention, fiction;
- the ideology acknowledging the fact that many societies studied by ethnographers have themselves a very interesting interpretation of rituals (expecially initiation, as we will see properly in the case of itako) revolving around the idea of building / generating human being;
- and finally the theory of human original incompleteness, deriving from paleo-anthropological and neuroscientific fields.

It is a concept that originates from the assumption that humanity is fabricated and modeled each time; the task to shape humanity in its variety is ascribed to the societies, that can recognize or hide this role.

This theory emphasizes not only the biological but also the cultural human incompleteness.

- To rely heavily on culture weakened some human biological functions,
- Culturally determined solutions, being particular and specific, are themselves a source of incompleteness

Since every cultural action is an act of selection, it produces historical and social peculiarities, and this leads to the notion of plasticity:

- Human being is plastic, subject to a variety of shaping action, following a casual modeling (like in everyday gestures). This is a continuous shaping process that humans undergo unaware, in the flow of the daily social life.
- There is also a deliberate project, an anthropo-poietic design (such as family, state, schools, institutions, ec..)., side by side with the previous; this leads to the definition of the actual agents and the objects of such shaping action. Here lies the connection with power.
- Lastly, it is important to take into consideration the importance of rituals - initiations in particular: these are the moments in which the members of a society become aware of the shape of their community, and question the devices and the techniques employed to achieve such shape.

Methodology

This work relies on bibliographic materials, and on a fieldwork that began in 2012 and continues today (2017). The main area of interest was the Tōhoku region, specifically the prefecture of Aomori.

The primary sources used for the analysis:

- my observations during fieldwork in the local area and religious festivals,
- interviews with itako practitioners, kamisama, some of their clients, different Shintō priest in Hachinohe and Hirosaki, and Buddhist monks, at the Osorezan, in Hachinohe, Aomori and Hirosaki,
- interviews and exchanges with scholars from similar background and field studies, academics from different Universities in Japan, and outside the country (Tōkyō, Sendai, Iwate, USA and Canada).
- Interview with experts at the Aomori Kenritsu Kyodokan, who spoke about the decrease in itako number.
- Interview with public officers at Aomori Prefectural offices, and the analysis of videos of the late 90s, and pictures that date back to the beginning of the 2000s.
- consultation of booklets, magazines, newspaper, internet website.

The Blind Fusha experience

Preliminary analysis of the previous researches and theories

Specific previous researches

- Kawamura Kunimitsu - *fusha* in Miyagi prefecture (1994),
- Satō Noriaki - *kamisama* initiation (1981),
- Kitahara Kanako - Tsugaru *itako*,
- Takiguchi Naoko - female shamans in Miyako islands (1984),
- Matsumoto Keikichi (2007) / Kobayashi Sakae - relationships between *itako* and Osorezan.

- Ikegami Yoshimasa – kamisama and folk practitioners
- Omichi Haruka
- Murakami Aki and Ioannis Gaitanidis

These researches offer first-hand information about the actual situation of the various regions and allow us to follow the development of the *fusha* practice and the main trends in their profession.
Alongside, important work (from Japanese and westerns researchers) about Japanese shamanism are:

- Sakurai Tokutaro, (Nihon Shamanizumu no Kenkyu, "Research on Japanese shamanism"1988)
- Hori Ichirō (Nihon no Shamanizumi, "Japanese Shamanism", 1971)
- Carmen Blacker, with her extensive study on Japanese shamanism, "The Catalpa Bow", even if she lacks a proper historical background,
- Alain Miller, who mainly focuses on the Tōhoku practitioners and the mythology connected, (1993, 1995),
- Massimo Raveri, with a deep analysis on Japanese religiosity in connection with shamanic and ascetic practices (1998, 2006),
- Gerald Groemer, and his study of female shamans in eastern Japan during the Edo period (2007),
- Barbara Ruch and her study on medieval shamanism (1991),
- Anne Bouchy with an intense work on female blind shamanism in the Kyoto area (1992),
- Peter Knecht with reports and study on the northeast blind shamans and their kuchiyose practices (1997).

Definitions and main traits

From at least the Edo period, Tōhoku had a tradition of different shamanic practitioners that followed a main distinction:

- Blind *fusha* very numerous in the past, but that for a concurrency of different reasons are rapidly decreasing;
  - Blind fusha have a wider range of names according to the locations: itako, ichiko, miko (migodo), onakama, waka, agata, ogamisama or okamin.
  - the blind fusha are popular for their activity as medium, with the ritual called kuchiyose, the calling of the dead. They also perform a variety of other ritual (such as kami-oroshi, oshirasama-asobase, uranai ecc.), and especially in the past they were renowned as local healers.
- Sighted *fusha*, that are increasing in number though not so much in popularity.
  - Sighted are generally called hayari-gamisama, kamisama, sensei.
  - the sighted fusha perform almost exclusively kamigoto and divination rituals

Itako numbers and presence

Combining previous data and my recent observations, we can attest the following trend:

- 1952: about 21/22 itako;
- 1964: the number is roughly the same.
- 1970: 33 itako attending the taisai, + 8 who left some days before.
- 1993: 15 itako
- 2012: 2 itako (Aoyama and Ogasawara)
- 2014: 3 itako (Aoyama, Ogasawa and Matsuda).

The same trend is evident in Miyagi (Kawamura);

- in 1984, 44 ogamisama and about 138 kamisama;
- in more recent years (2000's) ogamisama's number dropped to barely a dozen.

They don't represents all the itako practitioners in Aomori-ken, but the fluctuation is symptomatic of a general tendency in the whole Tōhoku area.

The reasons are varied:

- The active itako and ogamisama are getting older, they are retiring or reducing their activity, and most of them died in the recent years.
- There is a difficulty to find new apprentices
  - the spread of healthcare has prevented some diseases to lead to blindness;
  - the welfare system and the compulsory education provided valid alternatives to blind girls.

Meeting with the itako: the present-day situation

At present, I could meet three itako:

- Nakamura-san (born in the Thirties, completely

blind);
- Aoyama-san (born 1932, sighted);
- Matsuda-san (born 1972, sighed, the last itako);

Nakamura-san
- Like the traditional itako, she is from a farmer family of the rural north, in tight circumstances
- She experience a dramatic sight loss at a young age
- Her entrance in the practice is the consequence of a very precise family choice, a social attitude toward the blind, and an economic condition which offered no other choices.

Aoyama-san and Matsuda-san show clear signs of separation from this traditional image:
- Neither of them is blind
- neither of them entered the practice for economic reasons
  - ○ Aoyama-san represents a rare case of hereditary vocation (since her mother, blind, was an itako) and continued in the family path, conscious of the peculiarity of her situation
  - ○ Matsuda-san entered the practice following what she described as a purely personal vocation, after a life changing experience with an older itako

The three women may indeed well represent the shifting in the practice in two senses:
- they underline the possible variations within a given tradition (Nakamura-san and Aoyama have the same age)
- they show the possible paths that this tradition may take in the future

This can be considered an example of cultural creativity:
- a given cultural model (the itako practice) undergoes significant, and sometimes conscious modifications, based here on external reasons (the absence of blindness for various reasons)
- These modifications may lead to new solutions and individual innovations; the sighted practitioners took on a role reserved to the blind and managed to established themselves as recognized itako.

Changes in the practices

Types of ritual:
- The three women asserted that in the past itako were renowned for a varied range of practices,
  - ○ Kamioroshi
  - ○ Kuchiyose
  - ○ Oshirasama asobase
  - ○ Maijina and uranai
  - ○ Healing rituals
  - ○ Ecc..

- Today they are mainly associated with the kuchiyose and the communication with the dead.

Kuchiyose ritual too underwent some modifications:
- shrinking in the performance (especially at Osorezan);
- privatization of the performance with the abandonment of some collective rituals;
- the disappearance of some specific kuchiyose (ie, the 49th day kuchiyose);

Moments for the practices

- until the beginning of the 2000s, itako were participating in several matsuri and local celebrations, among which osorezan taisai, jizo matsuri in Goshogawara and the Iwaki-san taisai were the more renowned. Aside from these public moments, itako held private rituals for their clients in different moments of the year
- Today, they refer to have sensibly reduced the events:
  - ○ Aoyama-san and Nakamura-san don't attend any taisai anymore, and due to health issues are also reducing the private meetings
  - ○ Matsuda-san is still very active at the Osorezan taisai and in the private meeting, but she could introduce a new form of event: the meeting at the Makado onsen in Noheji, organized in association with the hotel managers, a travel company in Yanagita prefecture (that organize group tours), and a travel company in Tokyo

This opens to the consideration of a significant shifting

of the itako practices toward a post-contemporary for of religious sensibility, in which a new fascination for new form of shamanism is evident, and a new contact with the dead is strongly sought for.

Both Matsuda and Aoyama were strongly concerned with the great number of "fake" itako now propagating in all Aomori: these are considered false practitioners that exploit the name itako to offer uranai and healing ritual in various area of Hachinohe, and most of all on internet:

- numerous website of "itako uranai" offer the possibility to contact the itako via telephone and have a kuchiyose performed on the phone; this women, though are not recognized as itako by the actual practitioners.